



追悼

岩間伸之先生を偲ぶ

山縣 文治（関西大学）

岩間先生のホームページの最終更新日は、2017年2月17日。更新内容は3月19日に行われる「成年後見制度と市民後見人制度の実際」をテーマにした講演の案内である。各種学会のみならず、実践現場からの期待はますます大きくなり、まだまだ仕事は連続かつ継続し、社会福祉の研究や実践の向上に貢献するはずと多くの人は信じていた。それ故に、3月3日未明に届いた訃報はあまりにも衝撃であった。

先生の功績は枚挙に暇ないが、多くの人が首肯するのは、なんと言ってもジェネラリスト・ソーシャルワークの研究と、それに基づく地域福祉領域での実践であろう。その具体的な成果の一つが、冒頭の市民後見制度の確立と普及である。NPO法人西成後見の会を自ら立ち上げられ、その代表理事も努められた。被災地や社協、生活困窮者支援、認知症の本人や家族の支援など、社会福祉士としての日々の実践もおろそかにされることはなかった。

先生とは研究室でいろいろな話をした。先生が残された書籍の一つに『支援困難事例と向き合う：18事例から学ぶ援助の視点と方法』（中央法規、2014）がある。18事例の一つは、希死念慮事例である。当時私は、人間と死との関係をどのようにとらえるのか、自己決定としての死にソーシャルワーカーをはじめとする社会が介入できる根拠はどこにあるのか、などを思索していた。先生の話で印象的だったのは、希死念慮と自殺願望とで対応が違うこと、人間の尊厳という言葉で向き合ってはいけないことということである。

ところで、一部の人はよくご存じであろうが、先生は無類のアンティーク時計好きであった。コレクションを雑誌社に写真集にしてもらったことを本当に無邪気に喜んでおられた。「オールド・ロンジンの収集は、仕事と全く関係ないから面白いんですよ。アンティーク時計は、歴史を積み重ねてオンリーワンになった実用骨董ということが最大の魅力ですね」（月刊ペン第512号、2012）。

先生、現世の時計は時を刻むのを止めたようですが、西方の時計は、時を刻み続けていますか。傍には、お父さんやお母さんもいらっしゃいますか。山辺朗子先生はいらっしゃいますか。また、二人で書かれた新しい本ができれば読ませてくださいね。

合掌